

聾学校における聴覚障害を持った教師の役割に関する調査研究

楠八重 隼人

I 問題

現在、聾学校に勤務している聴覚障害をもった教職員(以下、聴覚障害教師とする)は301名いると報告されている(全国聴覚障害教職員協議会, 2011)。職業安定局高齢・障害者雇用対策部障害者雇用対策課(2012)の施策により、今後も、聴覚障害教師は増えることが予想される。

全国聴覚障害教職員協議会(2010)は、障害のある教職員の役割について以下を挙げている。①同じ障害のある児童生徒が自己の将来像を描く上での指針、②障害のない教職員との良き関係を示すことによる望ましい社会参加の関係モデルの提供、③障害に応じた指導方法の工夫の実践と提案、④当事者としての体験に基づいた保護者支援、⑤障害に即した職場環境の整備とバリアフリーのモデルの提供、⑥個々の児童生徒に見合った多様なコミュニケーションの提供、である。さらに、「聴覚障害のある教員は、当事者としての経験と知見を教育現場に反映させていく意味で聴覚特別支援学校における中核的役割をになう位置にあり、また今後の聴覚障害教育のありように影響を及ぼすものである」と述べている。

しかし聴覚特別支援学校において聴覚障害教師がどのような役割を果たしているのかについての調査はほとんど行われておらず、確かなことはわかっていない。そこで、聴覚障害教師の役割についてどのような状況であるのかを知ることは意味があると考えられる。

II 目的

聴覚障害教師が聾学校において、どのような役割を果たしているかを明らかにし、聴覚障害教師の役割の在り方について考察する。

III 方法

1 対象

中学部と高等部を設置している聾学校92校の聴覚障害教師と聴覚障害教師が所属する学部的主

事、聴覚障害教師の授業を受けている中学部・高等部の生徒を対象とし、それぞれに質問紙を郵送した。

2 質問項目

質問項目は以下の通りである。

- ①フェイスシート(聴覚障害教師、生徒)
- ②コミュニケーションに関する項目。聴覚障害教師と児童生徒のコミュニケーションの成立や手話の指導についてを質問したものである。
- ③学校内のバリアフリーに関する項目(聴覚障害教師、主事)。学校内での聴覚障害によるバリアをどのように改善しているのかについて質問したものである。
- ④障害認識やアイデンティティに関する項目、児童生徒のろう者としてのアイデンティティの形成について質問したものである。

また、聴覚障害教師、主事、生徒のそれぞれに合わせて質問項目を選定した。

3 期間

2012年2月中旬から3月下旬。

IV 結果と考察

1 回収率と有効回答数

42校(45.7%)から回答があった。学部主事は42校の54人、聴覚障害教師は42校の57人、生徒は42校のうち27校(29.3%)の110人からの回答を有効回答とした。

2 聴覚障害教師群／学部主事／生徒群の群間比較

聴覚障害教師の授業の分かりやすさについては3群とも4～5割が「どちらともいえない」と回答したが、その一方、3～5割が「分かりやすい」と回答していた。特に生徒は「かなり分かりやすい」という回答が多かった。「分かりにくい」と回答した者はほとんど見られなかった。以上のことから聴覚障害教師の授業はある程度「分かりやすい」と評価されていると思われる(表1)

表1 聴覚障害教師の授業の分かりやすさ

項目名	聴障教師	主事	生徒
かなり分かりやすい	9(15.8)	5(9.3)	32(29.1)
少し分かりやすい	16(28.1)	15(27.8)	27(24.5)
どちらともいえない	29(50.9)	31(57.4)	45(40.9)
少しわかりにくい	2(3.5)	3(5.6)	4(3.6)
かなりわかりにくい	0(0.0)	0(0.0)	1(0.9)
未記入・不明	1(1.8)	0(0.0)	1(0.9)
合計	57(100.0)	54(100.0)	110(100.0)

()内は%

表2 聴覚障害教師による指導方法の提案の頻度

項目名	聴障教師	主事
いつも提案している	5(8.8)	8(14.8)
時々提案している	28(49.2)	31(57.4)
めったに提案していない	11(19.3)	7(13.0)
全く提案していない	4(7.0)	4(7.4)
その他	4(7.0)	5(9.3)
未記入・不明	4(7.0)	1(0.2)
合計	57(100.0)	54(100.0)

()は%

また、障害に応じた指導方法の工夫を自身の経験をもとに実践し、提案もしているとの回答が6～7割あり、評価されている傾向にある(表2)。

個々の児童生徒に見合った多様なコミュニケーションモデルの提供に関しては、回答にばらつきが見られ、聴覚障害教師自身のコミュニケーション手段やコミュニケーションの相手の生徒等の要因により、聴覚障害教師に個人差があると推測された。

学校内のバリアフリーの整備への関与については学校による整備の必要性の有無に関係している。必要性がある学校では、聴覚障害教師の5～7割が積極的に関与していることが分かった。

生徒自身の障害認識やアイデンティティ形成の影響について、最も多く見られた回答は、聴覚障害教師では「どちらともいえない」(38.6%)であったのに対し、主事は「とてもそう思う」(44.4%)であった(表3)。また、生徒は聴覚障害教師の体験談について「とても参考になっている」が4割超と、最も多くが回答していた(表4)。このことから、

表3 聴覚障害教師による児童生徒へのろう者としてのアイデンティティ形成の影響

項目名	聴障教師	主事
とてもそう思う	11(19.3)	24(44.4)
少しそう思う	17(29.8)	20(37.0)
どちらともいえない	22(38.6)	8(14.8)
あまりそう思わない	4(7.0)	1(1.9)
全くそう思わない	2(3.5)	0(0.0)
未記入・不明	1(1.8)	1(1.9)
合計	57(100.0)	54(100.0)

()は%

表4 聴覚障害教師による体験談の児童生徒への影響

項目名	聴障教師	主事	生徒
とても参考になっている	16(28.1)	35(64.8)	54(49.1)
少し参考になっている	31(54.0)	10(18.5)	39(35.5)
どちらともいえない	8(14.0)	8(14.8)	12(10.9)
あまり参考になっていない	1(1.8)	0(0.0)	2(1.8)
全く参考になっていない	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
未記入・不明	1(1.8)	1(1.9)	1(0.9)
合計	57(100.0)	54(100.0)	110(100.0)

()は%

生徒にとって、聴覚障害教師の体験談は、障害認識やアイデンティティ形成につながるものではないかと思われる。

3 聴覚障害教師群内の比較

1) 所属学部間の分析

聴覚障害教師は小学部群17人(29.8%)、中学部群9人(15.8%)、高等部群17人(29.8%)にわけられた。

聴覚障害教師による授業の分かりやすさにおいて、小学部の聴覚障害教師の7割は評価が難しいようであった。中学部と高等部の聴覚障害教師の5割は分かりやすいと評価していた。指導方法の提案は、高等部の聴覚障害教師は6割が「提案している」と回答した。

対応手話や日本手話の指導について、小学部では、日本手話より対応手話を教えている傾向があった。高等部では、逆に対応手話より日本手話を教えている傾向が見られた。

学校内のバリアフリーの整備に関しては、全体

的に関与している傾向が見られた。特に小学部と中学部の聴覚障害教師の7割は、入学式や卒業式等の学校行事において、積極的に関与していることが分かった。

2) コミュニケーションモード間の分析

聴覚障害教師に日常的に使用するコミュニケーション手段について質問を行い、対応手話・日本手話・口話群 31 人(54.4%)、対応手話・日本手話群 9 人(15.8%)、対応手話・口話群 11 人(19.3%)に分けて分析した。

児童生徒との手話や口話によるコミュニケーションの成立について、回答にばらつきが見られた。

対応手話・日本手話・口話の3種類を使用している聴覚障害教師は、手話や口話によるコミュニケーションは概ね成立し、対応手話と日本手話の指導もしていると回答した人が多かった。

4 生徒群内の聴覚障害教師による学級担任の経験の有無

生徒に聴覚障害教師に学級を担任してもらったことがあるかを質問し、「ある」と「今してもらっている」と答えた群(以下ある群)40 人(36.4%)、「ない」と答えた群(以下ない群)66 人(60.0%)にわけられた。

障害認識やアイデンティティに関する項目について、ある群とない群を比較したところ、大きな違いは特に見られなかった。手話を使用する健聴教師が増えたこと(我妻,2008)や、聴覚障害に対する理解が深まったこと、聴覚障害教師と健聴教師が協力し合って望ましい人間関係を築いていることが児童生徒のろう者としてのアイデンティティ形成に良い影響を与えているのではないかと思われる。

V まとめ

聴覚障害教師は授業の分かりやすさ、学校内のバリアフリーなどにある程度役割を果たしていると思われた。特に生徒の障害認識やアイデンティティの形成については、大きな影響力を持っていると思われていることが分かった。

コミュニケーションに関する項目については、聴覚障害教師のコミュニケーション手段やコミュ

ニケーションの相手である生徒の関係により、ばらつきが目立った。

小学部に所属している聴覚障害教師は、授業の分かりやすさにおいて他の学部と比べ、「どちらともいえない」という回答が最も多く、評価が難しいようであった。また、バリアフリーに関する項目において、入学式や卒業式等の学校行事において、積極的に関与している傾向が見られた。

聴覚障害教師の役割のあり方について、全国聴覚障害教職員協議会が挙げた役割はある程度果たしているように思われた。

文献

我妻敏博(2008)聾学校における手話の使用状況に関する研究(3). ろう教育科学, 50 (2), 27-41.

職業安定局高齢・障害者雇用対策部障害者雇用対策課(2012)障害者雇用が進んでいない17都道府県の教育委員会に対して障害者採用計画の適正実施を勧告 | 厚生労働省 2012年3月30日 <<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r985200000263m7.html>> (2012年9月26日)

全国聴覚障害教職員協議会(2010)文部科学省中央教育審議会「特別支援教育の在り方に関する特別委員会」への意見書 | 文部科学省 2010年10月22日 <http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/attach/1298642.htm> (2012年3月26日)

全国聴覚障害教職員協議会(2011)SSKP 通巻. 492 5号. 全聴教第5. 18-19